消化器外科Ⅰ　長期選択実習の感想

上松由昌

消化器外科Ⅰの6週間の実習では、大学病院、Cleveland Clinic、市立稚内病院で、それぞれ2週間ずつ実習をさせて頂きました。

【大学病院】

大学病院では小児グループにお世話になり、また期間中に小児外科学会が開催されていたため、そちらにも参加させていただきました。学会期間中だったのであいにく手術は少なかったですが、5年生で回ったときに比べ知識が増え、例えば同じLPECを見ても、操作の意味に納得できる部分が増えて、嬉しく思いました。一方で、解剖や術後管理など、まだまだ勉強が必要だなとも痛感しました。小児外科学会は、今年は福岡で行われました。昼間は学会の雰囲気や規模、発表の方法などを知ることができ、夜は多くの先生方とお話しすることができて、大変楽しかったです。

【Cleveland Clinic】

Cleveland Clinicでは、主に移植を見学・参加させていただきました。実習初日からプライベートジェットに乗って肝移植ドナー手術に参加、レシピエント手術を見学させていただき、その後も多臓器移植や肝移植のドナー・レシピエント手術を2回ずつ参加・見学させて頂きました。ジェットに乗って臓器を取りに行くというのはスケールが大きく、いかにもアメリカな感じがして興奮しました。また、脳死ドナーからの移植を見るのも初めてでしたが、心臓が動いている脳死ドナーにメスを入れ、保存液を灌流・心停止させ、臓器を摘出するという操作は、感情的にショッキングでしたが、その後レシピエントに臓器を移植し、その臓器が新たな場所でひとまず正常に機能した、という一連の流れを見ると、臓器という医療資源を有効に活用できる治療法だということを実感出来ました。

【市立稚内病院】

市立稚内病院は、最寄りの同規模の病院がおよそ160km先（名寄市）まで無いという環境にある、宗谷地方唯一の総合病院です。同病院では、外科の先生方と一緒に行動させていただき、地方都市での外科医の仕事を体感することができました。実習中印象的だったのは、医療資源には限りがある事です。例えば、出張の麻酔科医は病院に一人しかいません。その中で2-3件の手術が並列で行われているため、導入が終了した後は、看護師や執刀医が麻酔の維持を行う必要があります。また、主に消化器などを扱う外科医は稚内に 4 人しかおらず、4人で24時間365日を交代して回す必要があります。さらに、泌尿器科が稚内から撤退したため、透析業務なども残ったスタッフ（稚内では外科医）で回す必要があります。このような状況下では、各人の総合力や工夫が求められると感じました。

また、稚内では外科の先生方に、毎日（本当に"毎日"）飲みに連れて行って頂きました。写真は、最終日に看護師の方々も一緒に飲み会を開いて頂いた際のものです。病院の皆さま、大変お世話になりました。

最後になりましたが、大学、クリーブランド、稚内、それぞれでお世話になりました方々に、大変感謝しております。ありがとうございました。

北海道大学第一外科レポート

安達大揮

私は 2016 年 4 月 11 日から 5 月 28 日、ゴールデンウィークを挟んで 7 週間、北海道大学病院第一外科にて実習をさせて頂きました。北海道大学病院にて 2 週間、苫小牧市立病院にて 1 週間、Cleveland Clinic にて 4 週間お世話になりました。

北海道大学病院では、朝カンファ、回診、内視鏡実習、縫合実習、手術見学（ストマ閉鎖、肝移植など）、教授回診、など様々なことに参加することで大変勉強になりました。グループの先生方はとても親切で、丁寧にご指導して下さりとても嬉しかったです。

苫小牧市立病院では、朝回診、手術見学、夕回診に参加しました。手術は、胃全摘、虫垂炎、腹腔鏡下左葉切除、肝部分切除、食道癌、大腸癌、鼠径ヘルニア、イレウス、などを見学しました。手術は、大学ではあまり見ることのできない common disease を見ることが出来て大変勉強になりました。また、大学病院と市中病院の違いなども発見できて面白かったです。また、よく知っている先輩が何人も勤務していらしたので、率直な意見やとてもためになるお話を数多くお聞きすることが出来て、とても良かったです。

Cleveland Clinic では、回診、カンファレンス、外来、ドナー取り、手術、などに参加しました。私は、移植外科で 4 週間お世話になりました。米国の医療を支えるのは、米国人のみならず、世界中から集まった向上心とやる気に満ちた人々でした。移植は、日本人、アルゼンチン人、ブラジル人、イタリア人、スペイン人、アイルランド人、アメリカ人、エジプト人などとても多国籍でした。多様な文化に触れ人間的に成長しながら、最先端の医療に携わっていける環境はとても羨ましく思いました。Cleveland Clinic では、臨床と研究を合わせて、20 人くらいの日本人の方々に出会いことが出来ました。数多くの日本人の方が頑張っている姿を目の当たりにして勇気づけられました。とても厳しく狭いもんですが、世界に扉を開く開放的な雰囲気ととても真剣で緊張感のあるピリピリした空気感のある最高の環境でした。米国は、職種が細分化され、個々人がプロフェッショナルとしてプライドを持って働くことで良い医療を提供し、さらにそれを支える最先端の医療ネットワークが開発されていました。医療従事者、他職種がチームとして、入院から退院までをそれぞれ役割を担い協力し合っていることに感動を覚えました。

今回の実習は、医療従事者としての自分の視野を広げるのにとても有意義でした。また自分に足りないことにも気づくことが出来ました。他を知ることでさらに自分への理解が深まりました。今回の実習で学んだこと、感じたこと、身に着けたこと、を忘れないように日々を過ごし成長していきたいと決意しました。

学生の間に米国の医療に触れるという大変貴重な機会を与えて下さった、武富教授、橋元先生、消化器外科 1 の皆様にこの場お借りしてお礼を申しあげます。
本当にありがとうございました。

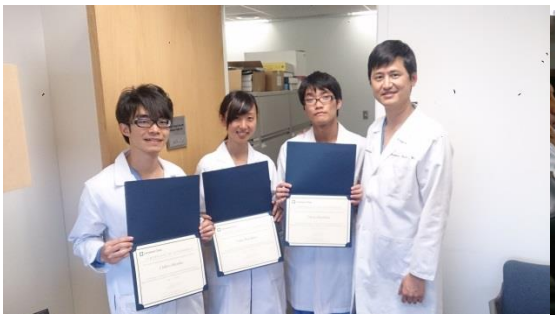
Cleveland Clinic

消化器外科Ⅰ選択実習レポート

幾島拓也

5月30日～7月8日までの6週間､消化器外科Ⅰにて長期実習をさせていただきました。内2週間強はアメリカ・オハイオ州のCleveland Clinic、2週間は天使病院での院外実習、残りの1週間強は北大病院の移植チームにて実習させていただきましたので、簡単にご報告させていただきます。

Cleveland Clinicでは、九州大学出身の橋元宏司先生のもと、移植外科での実習をさせていただきました。具体的には毎日のレジデント・スタッフそれぞれの回診への同行、各カンファ、外来業務、移植術の見学を中心として、アメリカでのレジデントやスタッフとしての医師業務を見させていただきました。その中で、病院内の職種の多さ、コメディカルや他診療科との関係性・かかわり方、病棟のシステム、外来のシステム、患者さん本人の医療に対する価値観や姿勢、手術室周りの環境などなど非常に多くの点でアメリカと日本との違いを感じました。もし日本でこのシステムができたなら、もし日本でこの考え方ができたなら、と思えるような部分もあり、自分の中での医療全体に対する考え方・価値観にも変化が生じたように思います。また、橋元先生や同じく移植外科で仕事をされている京大出身の藤木先生とお話しさせていただいた中で自分の将来の医師として目指すところ・働き方についての新たな考え方も生まれ、あらゆる意味で意識を変える良いきっかけとなりました。



天使病院では、外科・小児外科の中で実習させていただき、小児の胆道拡張症やWillms腫瘍、食道閉鎖など貴重な症例の手術にも入らせていただきました。また、大学病院ではあまり見る機会の少ない成人の定型手術も多くあり、それらの手術にも入らせていただくことができました。市中病院ならではの様々な臓器の様々な疾患を抱える患者さんを同時に管理する病棟業務も見させていただくことができ、改めて外科という診療科に求められる知識の幅・量の多さを実感することができました。

6週間の実習を通して、多くの経験を得られる非常に有意義な時間を過ごすことができました。Cleveland Clinicや天使病院での実習の機会を与えてくださった消化器外科Ⅰの先生方・秘書の方々並びに各病院でお世話になりました先生方にはこの場をお借りして厚くお礼申しあげます。本当にありがとうございました。

# 消化器外科Ⅰ　選択実習レポート

棟方奈菜

私は大学病院の移植グループで合わせて一週間弱、アメリカの Cleveland Clinic で三週間弱、苫小牧市立病院で二週間の実習を行い、大学とアメリカでは移植について、苫小牧では一般外科について勉強させて頂きました。

Cleveland Clinic では、移植手術を見学するのは勿論のこと、レジデントと共に早朝から回診を行ったり、各種カンファレンスに参加したり、先生方の外来を見学させて頂いたり、多くの経験を致しました。まず単純に驚いたのは、移植の種類が多岐に渡っていたことです。日本では見ることのない小腸や多臓器を一気に移植した患者さん、また同じ肝移植でも、脳死や心停止後のドナーから臓器を提供された患者さんがいっしゃいました。外来でも病棟でも感じた事ですが、総じて患者さんは皆大変元気な印象でしたし、臓器移植というものを他の治療と同列程度の意識で考えているように感じ、移植に辿り着くまでのハードルが高い日本とは大きく違う点を目の当たりにしました。

また、アメリカの医療現場を実際に見たり先生方のお話を伺うことで、日本の医療の良い面・悪い面を知る良い機会となりました。日本人の勤勉さや、生活水準がある程度低くても皆平等に医療を受けられる環境は素直に素敵なことだと思います。また、幸運なことに日本でも移植手術を見ることができたため、アメリカでの手術と比べると日本人の丁寧さがよく分かりました。一方で、アメリカは職種が多く、仕事の分業ができているため、医師が自分の仕事に集中できている点が非常に印象的でした。また、他職種という意味では術後のセラピーも充実しており、入院が長くなったり中々病状が改善しない患者さんにとっては、心のケアがあることで入院期間の過ごし方が全く異なるとのことでした。アメリカは資産家が個人的に寄付をすることができるため、病院によっては多くのお金が入ります。これは宗教上の考え方も影響するため、日本で同様にお金を集めることは難しく、こうした利点をそのまま適応するのは難しいです。しかし、今後の日本の医療を更に良くするためのヒントが沢山詰まっていたのではないかと思います。

苫小牧市立病院では、今までの専門的だった内容から一変し、一般外科の手術に入らせて頂きました。消化器だけでなく、呼吸器や乳腺も見学し、市中病院では多様な疾患を治療するために幅広い知識や技術が必要であり、それをそつなくこなす先生方の素晴らしさが光っていました。

六週間という短い間でしたが、大変濃密な期間を過ごし自分の価値観に影響を与えるような経験をすることができ、お世話になった皆様に大変感謝しております。実習を通して学んだことを常に念頭に置きながら、これからの医師生活に生かしていきたいと思います。

選択実習報告　消化器外科 I

深澤拓夢

6 週間の長期選択実習ですが、苫小牧市立病院、Cleveland clinic を約 2 週間ずつ、残りを大学病院で実習させていただきました。今回は、苫小牧市立病院、Cleveland clinic での実習について総括させていただきたいと思います。

苫小牧市立病院では、地方の基幹病院としての外科の役割をみせていただきました。実際に術野にはいらせていただいた手術も多く、より近くで多くの手術を見ることができ大変勉強になりました。苫小牧は自分の育った街でもあるので、いつかこの地域のために働くことができればと感じました。

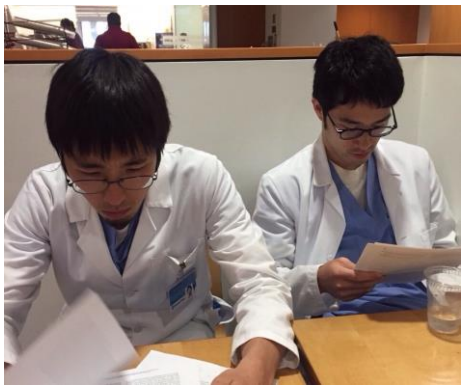
Cleveland クリニックでの実習は、ハードながらも大変充実したものでした。初日の肝腎同時移植から始まり、一週目はほぼ毎日のように肝移植が行われ、時には並列で肝移植なんてこともありました。日本ではあまり多くの件数を見ることのできない移植手術ですが、アメリカではこうも一般的なものなのかと驚くと同時に、状況の異なる移植症例をいくつか見せていただき、大変勉強になりました。また、脳死ドナーの手術の見学という貴重な体験もさせていただきました。

二週目は、一週目ほど移植手術が入らなかった（といっても 4 件ありましたが）ため、外来やカンファレンスを中心に見学させていただきました。外来では、移植後の患者さんが大変元気な方が多く、これが移植をやっていて良かったと感じる瞬間なのかと思うことができました。

二週間の見学を通して感じたこと、学んだことは数多くありますが、まず心に残ったことは、移植という医療の素晴らしさとその問題点です。もう治らないような人たちが、移植によって劇的に改善し喜んでいる姿をみていると、日本でももっと行うべきで、自分もその分野で働きたいと感じることができました。しかしながら、脳死ドナーの手術は衝撃的であり、これが日本で受け入れられるのかということを感じずにはいられませんでした。

日本で脳死移植が増えることが良いことなのかどうかは正直わかりません。ただ、日本ではできない医療がアメリカでは盛んにおこなわれており、そこでは実際に日本人の先生が活躍されていました。このことに気付けたことは、自分の将来を考えるうえで大きな影響をもつだろうと思います。

最後になりましたが、お世話になりました苫小牧市立病院の先生方、Cleveland clinic の移植外科の先生方、そして第一外科の先生方に、心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



勉強中 at Au Bon Pain

実習の合間に Cavs の優勝パレードへ

消化器外科Ⅰ　選択実習レポート

石塚　千紘

消化器外科Ⅰの6週間の実習では、米国Cleveland Clinic、岩見沢市立総合病院、北大病院の3施設で勉強させていただきました。

まず米国 Cleveland Clinic ですが、冠動脈バイパス術や輸血などを世界で初めて行った病院としても知られており、米国ベストホスピタルで常にランキング上位に位置しています。そのような病院でObserverとして、主に移植外科の見学をして来ました。今回の訪問のメインでもある肝移植手術は、2週間で4件立ち会うことができました。たまたま私が訪問した時期はやや件数が少なめだったということですが、それでも日本ではなかなかお目にかかれない手術を間近で見ることができたことは非常に貴重な体験となりました。

また、日本とアメリカの医療システムの違い、文化や宗教の違いによる移植に対する考え方の違いなどを自分の肌で直接感じることができました。違いを学んだだけでも大きな収穫でしたが、この世界レベルの病院に日本人を含め世界各国から集まった医師の方々を見て、自分のやりたいことや夢を叶えるためにはこういった道もあるのだということを知り、大きな刺激となりました。

岩見沢市立総合病院では、外科の先生方と行動を共にし、実習期間中のほぼ全例の手術に入らせていただきました。大学では普段なかなかできないような手技もたくさんやらせていただく中で、自分の手で目に見える形で治せる外科の魅力を、改めて感じることができた気がします。また同病院は、道内最大級の透析室を持っているということもあり、シャント形成術や経皮的シャント拡張術も多数見学することができ、良い勉強になりました。

地域の中核病院であるがゆえ、手術症例も多く毎日忙しい日々でしたが、夜には食事や飲みにもよく連れて行っていただき、とても充実した2週間でした。

大学病院では肝胆膵グループに所属し、市中病院とは違った難易度の高い手術を見学したほか、症例のプレゼンをする機会も与えていただきました。プレゼンでは質問されたことについてなかなか答えられなかったりといったことがあり、勉強不足・理解の浅さを痛感しました。

このように 6 週間で様々なことを経験し、大変充実した実習となりました。貴重な機会を与えてくださった消化器外科Ⅰのスタッフの皆様に、感謝申し上げます。

消化器外科Ⅰ実習報告

砂土居泰生

5 月 30 日から 7 月 8 日までの 6 週間、消化器外科Ⅰにて、小児外科グループに所属して実習をさせて頂きました。私は間の 4 週間を天使病院でお世話になりました。

天使病院では研修担当の外科の山本先生のもと「研修医と同じ生活をしてみては」とのことだったので、朝 6:30 より初期研修医の先生方とともに回診をまわり、9:00 から手術という生活を送らせて頂きました。天使病院では胃癌や鼠径ヘルニアといった頻度の多い疾患から、小児悪性腫瘍や泌尿・生殖器の奇形といった比較的珍しい疾患まで多種多様な疾患を経験しました。また、手術だけではなく、採血や各種検査、外来、勉強会なども研修医の先生方について参加しました。忙しいなかでも、意見を言い合い、助け合いながら和気あいあいと研修医生活を楽しまれている様子は自身の病院選びの参考にもなりました。山本先生をはじめ、指導して下さった先生方、何から何まで面倒をみて下さった初期研修の先生方、有意義に楽しく実習をさせて頂きました。ありがとうございました。

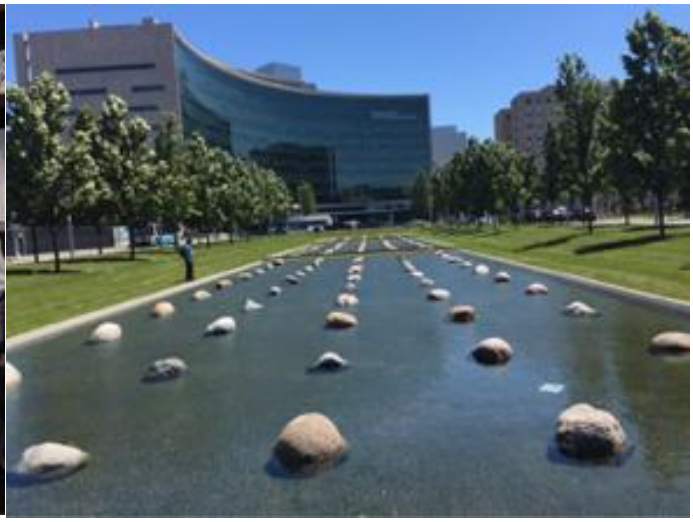
大学病院では、手術をはじめ、プレゼンや検査など小児外科グループの先生方に多岐に渡りご指導いただきました。また、このような機会を与えてくださった武冨教授、ならびに消化器外科Ⅰのスタッフの皆様には本当に感謝しております。6 週間という短い期間でしたが、大変お世話になりました。ありがとうございました。

2016年消化器外科Ⅰ選択実習報告

高橋遼

5月30日から7月8日まで北大第一外科にて実習をさせていただきました。ご報告させていただきます。

私は5月31日から6月14日までは市立函館病院にて実習をさせていただきました。虫垂炎や胆嚢摘出など市中病院ならではの多彩な疾患の手術に参加させていただき、閉創などを手伝わせてただきました。
救急部を見学させていただく機会もいただきまして、当番日にしては比較的件数の少ない日であったようですが、研修医の先生方、救急科の先生方の道南地域の最後の砦として働く姿を拝見させていただきました。
また、何度も食事や飲みに連れて行っていだだき、函館山や八幡坂といった観光名所にも連れて行っていただきまして、大変函館を満喫することができました。

6月20日から7月5日までアメリカのクリーブランドクリニックにて実習の機会をいただきました。
まず、移植に関してですが、実習の初日から肝腎同時移植を見ることができ、非常に多数の肝臓移植手術を見学させていただきました。脳死ドナーの臓器摘出を見学させていただく機会もありました。バックテーブルに参加させて頂くこともできました。日本に比べ、手術速度が圧倒的に速く、驚きました。
朝6時から手術に入ったり、夜0時過ぎまで病院にいたりと、タフな日々が続き、とても刺激的な毎日が怒涛のように過ぎて行きました。
次にクリニックの雰囲気についてですが、スタッフの方はどの方も明るく、いつも冗談を飛ばして笑っていました。自分の拙い英語も理解してくださり、話しかけると非常に丁寧に対応してくださいました。一見怖い先生でも見学させていただいてもいいか聞くと、笑顔で快く受け入れてくださり、説明してくださったりしました。看護師や薬剤師、physician assistantがガンガン意見を言っていて、そこに一切の上下関係は感じられなく、真のチーム医療の形がそこにあるように思われました。
アメリカの医療現場の雰囲気を学ぶことができ、大変有意義な実習でした。

最後になりましたが、このような大変貴重な機会をいただきましたて本当にありがとうございました。お世話になった先生方ならびに秘書の皆様に厚く御礼申し上げます。